令和5年度第3回福生市子ども・子育て審議会

日時：令和5年11月9日(月)午後2時から

場所：もくせい会館2階201会議室

1 開会

【事務局】定刻となりましたので、始めさせていただきます。本日前半の進行を務めます子ども家庭部長の吉野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは「令和5年度第3回福生市子ども・子育て審議会」を開会いたします。始めに、配布資料の確認をいたします。皆様に事前にお配りしておりますものは、本日の会議の【次第】、【資料1】から【資料6】でございます。また当日配布資料として、【資料7】【資料8】を机の上に置かせていただいております。なお、本日の会議の次第につきましては、事前にお配りしたものに、内容の修正がございましたので、本日机の上に置かせていただいたものをご覧くださいようよろしくお願いいたします。各資料は皆さまのお手元でございますでしょうか。不足等がありましたらこちらまで挙手にてお知らせいただきたいと思っております。大丈夫ですか。何かもし気が付いたら、その都度おっしゃっていただきたいと思っております。

続きまして、欠席委員の報告をいたします。野口委員、多田委員、本間委員、木村委員の4名より、ご欠席の連絡をいただいております。また山西委員におかれましては、所用により遅れてくると連絡をいただいております。

それでは本日の会議はお手元の次第に沿いまして進めて参ります。会議の終了時刻は概ね午後4時を目途にさせていただきますと存じます。以上、御案内とさせていただきます。

2 会長挨拶

【事務局】続きまして、次第2、佐々会長よりご挨拶をお願いいたします。

【佐々会長】どの会議でもそうですが、回が重なるごとに福生市の取り組み方というものもしっかりと見えてくるかと思っておりますけれども、資料を確認させながらというところから出されることということについて今回もあると思っておりますので、それらを重ねながら、担当の課の方からの、今回このところをちゃんとしたいというふうなことについても、ご説明があると思っております。それらをしっかりと聞いていただいて、疑問点だけでなく質問も、こういったところがわからないとかそういうことがございましたら、質問していただけるようお願いいたします。それで、こういうところまで今回はしたいというふうに一応計画の中で進行していかなければならないタイムリミット的なことというのがアンケート調査を通じていろいろとあると思っておりますので、それらのことと合わせながら進行させていただければありがたいなと思っております。忌憚のないご意見を出していただけるようお願いいたします。ありがとうございました。

【事務局】 どうもありがとうございました。それでは、これより、次第3、議題に入らせていただきます。以降の議事進行につきましては、佐々会長をお願いいたします。

3 議題

(1) 令和5年度第2回福生市子ども・子育て審議会会議録について

(2) 子ども・子育て支援に関するアンケート調査について

- ・児童福祉法改正等に伴う事業計画への影響について説明
- ・子ども・子育て支援に関するアンケート調査票について最終確認

【会長】 それでは、本日の議題に入らせていただきます。議題（１）令和５年度第２回福生市子ども・子育て審議会会議録について事務局より説明をお願いいたします。

【事務局】 子ども政策課の相羽でございます。よろしくお願いいたします。着座にて失礼いたします。議題（１）でございます。【資料７】をお願いいたします。

こちら前回令和５年１０月１６日に行われました子ども・子育て審議会の会議録でございます。お名前を伏せた形で市のホームページに公開する予定でございますので、こちらの会議録、ご確認をいただきまして、何かございましたら、１１月２４日金曜日までに事務局へご連絡をいただければと存じます。いただいたご意見に基づき、会議録を適宜修正後、ホームページに公開いたしますのでよろしくお願いいたします。説明は以上でございます。

【会長】 ありがとうございます。何かご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。大丈夫でしょうか。発言がないようですので次の議題に移りたいと思います。

議題（２）子ども・子育て支援に関するアンケート調査について株式会社名豊よりご説明をお願いいたします。

【コンサル】 株式会社名豊の糸魚川でございます。本日もよろしくお願いいたします。着座にて説明の方をさせていただきます。それでは資料の方ですが、【資料１】の方からご覧いただけますでしょうか。今回、児童福祉法改正に伴う事業計画への影響ということで、前回の会議の方でもこの令和４年の児童福祉法改正がどのような形で行われ、それが計画にどのように反映したりだとか、さらにはこのアンケート調査の方にどのような形で影響するのか、その辺りの議論というところもされたところだと思います。その内容を今一度事務局の方で整理の方をしまして、こちらの【資料１】の方で取りまとめの方、しておりますので、こちらの方について、まず説明の方させていただきたいと思います。

まず（１）児童福祉法改正及び第３期計画手引きに基づくポイントということで、下に表の方がありますが、まず、児童福祉法の一部を改正する法律というのは、令和４年に行われております。こちらの方の内容とさらにこの第３期事業計画というのが、今回の子ども子育て支援事業計画、３回目の計画策定という形になります。この第三期市町村子ども・子育て支援事業計画等における「量の見込み」の算出等の考え方ということでそれぞれの事業ごとにアンケート調査に基づいて量を見込んでいく形になりますので、この量の見込みの仕方というのが、国の方から手引きというものが出ておりますので、この２つの内容が大きく今回のアンケート調査にまず影響するというところで、整理の方させてもらっています

上段の方の児童福祉法等の一部を改正する法律ということで主な点、３点あげております。全ての妊産婦・子育て世帯・子どもの包括的な相談支援を行うこども家庭センターの設置というところが言われています。さらには身近な子育て支援の場、例えば保育所等こちらの方で相談機関という形でいわゆる相談機能充実に努めていくという事で言われております。さらには訪問による家事支援だとか、児童の居場所づくりの支援、親子関係の形成の支援を行う事業というのが新しく３つの事業というところが新設されました。さらには児童発達支援センターが地域における障害児支援の中核的役割を担うということで明確に下さいということで３点、こちらの方の法律の方で言われております。

さらにそれと少し連動する部分がありますが第三期事業計画の手引きの方では、レスパイト・ケアと併せて、児童の養育方法や関わり方について支援が必要な親子であったり、保護者の育児放棄や過干渉等により自ら一時的な利用を希望する児童等についても、本事業の活用が想定される数として量の方を見込んでいくということで、非常に対象、レアケースになってくるかもしれませんが、このアンケート調査の方でも何らかの形で聞くことを国の方からも言われております。さらに上段の方と連動する形になりますが、子育て世帯訪問支援事業、これは訪問による家事支援ということで、上の方に書かれているかと思えます。さらには児童育成支援拠点事業ということで、上段の方では児童の居場所づくりの支援という事で言われております。そして親子関係形成支援事業ということで、この3つの事業が新しく創設の方、されますので、こちらの方を地域子ども・子育て支援事業にまず位置付けの方をして、そして「量の見込み」だとか「確保方策」を今回の計画の中に謳わないといけないということが言われております。

この大きく2点を受けながら、さらには背景の方でこども大綱というのがこの12月決定で国の方で動いていますので、このこども大綱というのが子どもの権利を保障するという事で、子どもを誰一人取り残さず、健やかな成長を社会全体で後押しするというような大綱になっておりますので、これを背景としながら、今回の計画を作っていくかといけないという形になります。

そういったところで事務局の方で策定コンセプトということで、位置づけの方をしております。大きく基本理念については「子どもの育ちと子育ての喜びが実感できるまち」こちらはまた今後この基本理念について見直しをしていくかどうかという議論もあるかと思えますが、これらの背景の方ではまず、この基本理念、踏襲しながら、継続しながら審議の方、進めていく形になるのではないかと思います。

しかしこの5年前と比べて、様々な背景の方が変わってきておりますので、こちらの方課題ということでいくつか挙げておりますが、この課題を受けてポイントを3つ絞り込みさせてもらっています。1つ目のポイントが、少子化及び生活様式の変容に伴うニーズの変化への対応ということで、人口関係、さらにはコロナ等の生活様式、こういったところも大きく変わってきていますので、これらからこのニーズが様々どう変わってきているのかということの、まず1つめのポイントをしっかり押さええないといけないというところ。さらには特別な配慮が必要な子どもやその家庭に対する切れ目ない支援の充実ということで先ほど法の関係でもレスパイト・ケアだとか児童の養育方法であったり関わり、こういったところに非常に課題を抱えている親御さんが見えになるというような背景もありますので、こういったところからこの支援、特別な配慮といったところを切れ目なく支援を充実していくかといけないというところ、そしてポイント3では社会生活を円滑に営む上で困難を有する子ども・若者に対する対応ということで、先ほどのこども大綱の方では貧困の関係であったり、さらにはニート・ひきこもりの問題であったり、そういった幅広く子どもの育ちというところを支える形になっていきますので、そういったところからこのポイント3の方についても新しく絞り込みの方させてもらっております。

このポイントが事業計画の方に影響していくということで、右側の方ですが、表形式になっているかと思えます。こちら、冊子の方も皆さんお持ちかと思えますが、第2期の福生市の子ども子育て支援事業計画の骨子と言いますか、柱立てになっております。一番左が、子どもの育ちと子育ての喜びが実感できるまちということで、それに対して6つの目標があります。そしてそれぞれに施策の方向というのが位置付けられて、そして計画の中では具体的な事業というところが位置付けられております。

先程の3つのポイントを見ると、例えば1の1の主な事業の方でいくと、訪問による家事支援だとか、こういった新しい事業を検討していくかといけないということであったり、1の2のところ

いくと親子関係の形成の支援を行う事業、こういった位置付けであったり、さらには2の1のところでは、トワイライトステイであったり乳幼児ショートステイ、そういったところの事業も検討しなくてはいけないということ。さらには3の2のところしていくとプレイパークの支援であったり、子どもの居場所、こういったところの事業であったり、さらには4の1の方でいくと児童虐待防止のネットワークづくりというようなそれぞれ法の動向であったり、新しくコンセプトを出すことによって、具体的事業の関係も、今行われている事業を継続していくもの、さらには事業を強化していくもの、さらにはこれまで実施の方していないのですが、新しく事業として実施をしていくもの、そういったものを大きな事業計画の枠組みの中で検討していくというような形の関係性があるかと思います。そういった中でまず市民の方々にこれら背景のもと、どのようなニーズを持っているのかということを知りたくて今回のアンケート調査の位置づけになってくるかと思っています。

それでは【資料3】の方ですが、こちらの方、前回の会議の方でもアンケート調査票、本日の資料の方でいきますと【資料8】の方でアンケート調査票の方が準備されているかと思っています。前回の会議の方でも、このアンケート調査の方の説明の方させていただきながら皆さんにご意見を言っていたわけですが、改めて【資料3】の方では、このアンケート調査がどのような構成になっているのかということをご確認いただきたいと思っています。大きく保護者の調査と、本人の調査ということで、小学生本人、中学生本人というものがあありますが、それぞれ保護者の調査票と、子どもの調査票につきましては、概ね構成が似ておりますので、こちら【資料3】の方については1枚目の方が就学前児童・保護者用の設問構成、そして2枚目の方については、小学生本人調査の設問構成という形で入れております。まず保護者の調査ですが、それぞれ問1から裏面の方で問51番まであります。こちら【資料8】のアンケート調査票の方と連動の方しております。それぞれ大項目、中項目、そして目的という形で入れておりますが、一番右側の方に備考という形で枠の方を設けておまして、国の必須設問、国の任意設問というところの内容の方を入れております。この必須設問、任意設問というのが先ほどの第三期事業計画の手引きの方で、国の方ではこのような設問を聞いて、量見込みをするということで、位置づけの方をされておりますので、ほとんどの自治体さんがこちらの必須項目については同様に聞いているというような形になります。概ね任意設問につきましても多くの自治体さんの方が聞いているような形になっております。

これで見させていただきますと、問1番から問31番までは概ね国の方の求められる項目ということでご覧いただけるのではないかなと思います。ごめんなさい。裏面の方でいきますと問32番までですね。すみません。そして問33番からが福生市独自の項目という形になります。しかし備考の方はいくつか内容の方を入れております。先程の児童福祉法の改正であったり、さらには社会的な動向の中でのポイントの絞り込みをさせてもらっておりますので、これら動向を受けて、新しく福生市として独自の項目を聞いているというような形になります。その中では前回の第2期の方で、聞いている設問等もありますので、5年間の経年比較、同じ対象者ではないのですが、同じ年齢層を持つ保護者さんの意見がどのような形で変わってきているのかということは変化がみられるのではないかなと思います。

まず、特にこの福生市独自の設問の方でいきますと、子育てに関して不安や負担を感じるかということであったり、どのような支援・対策が有効と感じるのかということ、先ほど社会的な動向の中で、法律が変わったりだとか、さらには新設事業というのも出てきていますが、福生市の方ではそれがどのような状況で子育て親子の方に困り感であったり、不安感、こういったところが影響が出ているのかということ、やはり確認していかないといけないのではないかなと思います。そういったところでこの児童福祉法の改正に基づいて、それぞれのニーズを把握するというところで、問34番、35番というところも聞いている形になります。そのほか問44番から下の方につきましては、こども大綱に

基づきというような形も入れております。まだまだこども大綱につきましては12月公表という形になっておりますので、また後程説明の方もさせていただきたいと思いますが、概要につきましては今少しずつ出てきているところがありますので、それらこども大綱も若干踏まえながら、新たな設問というところを入れている形になります。その中ではいわゆる生育環境・養育環境、こういったところによる教育の格差であったり、さらにはヤングケアラーの問題であったり、さらには子ども・若者の権利という問題、こういったところが大きく出てきておりますので、これらも少し確認ができるような形で、設問としては準備の方させてもらっているという形になります。

そしてもう1枚の方の子ども本人の方の設問の方につきましては、こちらの方につきましては福生市独自のすべて設問の方になっておりますので、国の方の第三期の手引きの方では、保護者のニーズを聞いて量を見込んでいくという流れになっておりますが、福生市さまの方では子ども本人の声もこの段階で保護者と併せて聞いていくというような形で、設問の方としては準備の方をさせてもらっております。

そして資料の方ですが、【資料2】の方に、前回の会議の方で、この保護者のアンケート、そして子どものアンケート、どれだけアンケートを配布するのかというところ、それが人口に対してこういった形の数で取られるのかということのご質問があったかと思っております。こちらの方資料の準備をさせてもらっております。子どもを対象として就学前児童、小学生、中学生という形でそれぞれ令和5年4月1日現在の人数ということで、就学前児童の方がトータル2,023になります。そして小学生の方がトータル2,297、そして中学生の方が1,267という形になります。配布する数が、就学前児童1,200、小学生1,200中学生600という数になりますので、概ね割割的には若干前後しますが、50%前後というところであります。ですので、概ね福生市さまの子どもの保護者さまに対して半分の方のアンケートを取るという形になります。非常に率としては高い形でアンケートを設定されているのではないかと思います。しかしなかなかアンケートも100%の方、回答いただける形ではない形になりますので、回収率の方、見込んでも十分統計的にもものが言える数が得られるのではないかとということで、準備の方させてもらっております。

そして資料の方ですが、【資料3】の方に基づいて【資料8】の方、それぞれアンケートの方、準備しておりますので、こちら【資料8】の方につきましては前回の会議の方で説明させてもらっておりますので、こちらの方の説明につきましては省かせていただきたいと思います。以上で説明の方、終わります。

【会長】 ありがとうございます。何かご意見・ご質問ございましたらお願いします。はい、どうぞ。

【委員】 資料の質問なのですが、【資料1】の左側の先ほどご説明いただいた、第三期市町村子ども・子育て支援事業計画等における「量の見込み」の算出等の考え方ということで、レスパイト・ケアと併せてという記載があるのですが、教育関係のことはあまり詳しくないので、レスパイト・ケアとは何かというのをご説明いただけますでしょうか。

【コンサル】 よく子どもの関係、さらには介護の関係でもあると思うのですがけれど、在宅で子育てをしている中で、非常に子育てに疲れを感じてしまって、いわゆる身体的であったり、精神的な負担がかかるということで、そういったところで頼れるような場所であったり、人であったり、こういったところを休息できるようなそういったサービスというような形になるのではないかと思います。

【会長】 今現在福生にはないのですね。

【事務局】 ないですね。

【会長】 ないと思います。よろしいですか。そのほかご質問、はい、どうぞ。

【委員】 すみません。前回説明していただいた、抽出して子どもが答えた場合の【資料8】の方、こちらでヤングケアラーという言葉に対して、認知度を調べるという項目があると思うのですが、このヤングケアラーというのは家庭内で子どもたちが、本来子どもらしく過ごす時間を家の家事とかで手を取られてしまうという認識で使われている言葉というのは、知っているのですが、今学校内のヤングケアラーという立ち位置の生徒が存在しているということも問題になっていると思うのです。その辺について、すみません、本当は前回の時に言わなければいけなかったのですが、この質問だとあくまで家庭内のヤングケアラーに対しての設問になっているのですが、家庭内に限らない聞き方というのは出来ないのでしょうか。

【会長】 お答えをお願いします。

【事務局】 そうですね。今言う通り様々な場面でのという部分もあろうかとは存じます。教育に関しましては、今計画の方ですね、そういった計画を来年度、令和6年度、策定に予定しております、その関係で基礎調査というものを実施してございます。その部分との連携をさせていただきながら、ちょっと向こうの方もすでに動いている部分があるかと思うのですが、そこが重複しないような形で可能な範囲で今確認をして、もしその部分を変更できるのであれば、そこをもうちょっと加味した形で対応できればなど、そのようなどころでございます。

【会長】 よろしいでしょうか。

【委員】 すみません。先ほど、ヤングケアラーで学校に行けない子がいるということは知っているのですが、学校のヤングケアラーというのはどういう…。

【委員】 それは例えば学校内で今インクルーシブ教育という形で、いろいろな少し支援が必要な生徒だとか、そういう子ども達も通常の学級になるべく入れて、みんなで学んでいこうという教育方針が進んでいると思います。昔からそうだと思うのですが、そんな中でどうしても問題を起こしやすい生徒に対して、とてもまじめで聞き分けの良いきちんとした生徒がお世話係になっている実情が、学校で結構問題視されているという話で、ヤングケアラーという言葉とは厳密には違うのですが、そういう子たちというのは結局そういう児童のお世話で、自分の勉強ができない状況になっているとか、そういうことがその子の学びの場を失っていくという、そういう現状があるという話だったので、その辺には触れられないのかなということです。

【会長】 よろしいですか。

【委員】 私どもの保育園として、第三者評価を毎年受けている状況の中で、高いパーセントを取るからというようなお話が、今ありましたけれども、無作為でされたときに、私どもも5か国語くらいの内容のものを揃えて、全所帯にお送りするのです。無作為はしませんが、それで無作為になったときに、

外国の方がいたら、最後に外国語のがついているので、用意はあるのかもしれませんが、無作為だとそういうところに行かないわけですね。その辺のところはどうか。

あとは何パーセントになったら成立するのか、高いパーセントと言っても何パーセントを予測されているのか、私どもは50%以下だったら、成立しないと言われて、かなりの声掛け、20年近くやっているのですが、かなり保護者の方にはご協力いただいて、声を掛けてという形でやっているのですが、かなりそのパーセントを上げるために労力が必要としているのですが、高い確率というのは何パーセントを予測されているのか。

それから無作為だと、今現状だとどこの保育園でもそうなのですが、お子さんは日本で生まれたりしていますから日本語ができるのですが、中国、韓国、ベトナムの方が、親御さんが日本語ができないのです。親御さんの日本語ができないその通訳を小学生のお兄ちゃんやお姉ちゃん、保育園の年齢の高い子が先生の言ったことを通訳したり、それから翻訳機を使って親御さんに説明をしているのです。そういう中で、無作為だと果たしてそういうところに回答が得られるのかなど、現実に行っているものから、ちょっとそういう疑問がありましたので、お願いいたします。

【事務局】 そうですね。今ご指摘の部分でございます。まず外国語対応、こちらの今お話のあった【資料8】の⑥、すべての言語をカバーしているわけではないのですが、これは4か国語で、基本的には、子ども子育てに関する調査ですという内容と、細かいことにつきましては事務局へお越しく下さいという文面を入れさせていただいております。これ、前回第2期の時の調査もこういった形になるのですが、やはり今お話がありました通り、なかなか日本語が難しい方については、対面でやらないとなかなか難しいかなどというのは、過去の調査でも把握してございまして、市の方では多言語のタブレットもございまして、そういった部分を使いながら、ちょっとお時間は取ってしまうのですが、お越しいただいて、個別にやり取りさせていただいて、そこに外国語対応のタブレットもかませながら、ひとりでも多くの方の意見を吸い上げさせていただきたいというところでございます。

あと2点目の回収率でございますけれども、前回の調査、これ前回の審議会であったかもしれませんが、50%を超えたような状況でございまして、事務局としては今回もそこをひとつの目標として出させていただいて、考えてございます。以上でございます。

【会長】 はい、ありがとうございました。

【委員】 今の回答いただいた内容に関して、回収率は50%を目指すということなのですが、つまりこれは配布率に対しての回収率が50%なので、全体の数にすると、大体児童数、生徒数、均して大体50%強の方々に配布したとして、その半分ということは、全体の25~28%くらいの児童生徒、あるいはその保護者から回答があればよいというような考えでよろしかったですか。

【事務局】 はい。一応そういうような形なので。

【会長】 どうですか。

【委員】 このアンケート、なるべく多くの方から、なるべく多くの意見がいただけるというのがやっぱり大事だと思うのです。この間の時は5年前で、5年に1回しかできないということを考えると、やっぱりある程度の成果をきちんとあげられる形でやる場合、もちろん予算の問題ですとか、いろいろなことがあるというのは承知なのですが、今回小学生、中学生はこの後に全員へのアンケートもあ

りますよね。ただちょっと就学前児童の保護者と言いますか、保護者層に対するアンケートは全戸調査みたいな感じにはできないのでしょうか。

【事務局】 現状を申しますと、今お話のあった予算の都合もございまして、現時点では難しいかと思えます。ただちょっとこれも、今回は第3期の子ども子育ての計画に向けた基礎調査ということでやらせていただきますけれども、今後は国の今後策定される予定のこども大綱を踏まえて、第3期の子ども子育て支援事業計画に加えて、その中に先ほど糸魚川さんからの説明でちょっとされましたけれど、子ども計画というような話もございまして。この辺りが詳細が見えていない状況もございまして、令和6年度、今具体的に時期は申し上げられないのですが、その内容次第によっては令和6年度の早々に、今回の調査では足りない部分を何かしらそういった形で釣り上げる必要があるかと考えています。その際に一つの考え方としてそういった一人でも多くを釣り上げるための、調査のやり方というのも考えなければいけない部分もあるかと思うのですが、そういったところでもしその辺の部分が取れるようであれば、令和6年度の中で、検討できればというような形で考えております。

【会長】 よろしいでしょうか。はい、そちら。

【委員】 先ほどの質問とちょっと被ってしまうかもしれないのですが、福生には外国の方が多いと思うのですが、この質問の中に例えばご両親の出身国というのとは入れられないのでしょうか。例えば、片方が外国の方、両方が外国の方というのを入れてもらえると、例えば外国の方が困っているということが明確にわかりやすいのではないかと。ちょっとデリケートな質問になってしまうのかと思うのですが、もしそういうところを入れられたら、福生独自の子育てがまた何かよくなっていくのではないかと考えたのですがどうでしょうか。

【事務局】 その件につきましては、設問として当然入れることは可能なのですが、その辺りの聞き方によって人間的な部分ですとか、あとはなかなか、今回は子ども子育ての計画の中の基礎調査という中になると、その部分が位置付けがどうなるかというのがありますので、ただ今おっしゃっていた内容については、今後の福生の課題の部分というところも何かしらそこでは必要になってくると思いますので、またここ、ちょっと具体的なことは申し上げられないのですが、令和6年度以降の中で、何かしらそういった部分の情報の取り方というのでしょうか、その中では検討させていただきたいと思えます。

【委員】 ありがとうございます。

【委員】 今のご意見をすごくわかるなという中で、アンケートの中で何を聞いて結果にどう表すかということが重要ななと思っていて、その事で言うと、正直に答えると、今この困ったことを紐づけた結果というのはなかなか出しきれないのかなと思うと難しいのかなという意味で、当たり前のように言われるのですけれど、このアンケート結果の中に、最初の聞く項目に男女の性別を聞く項目があるじゃないですか。昨今そういった性別に関して、配慮が必要な時代の時に、その性別が今回のような調査結果に、必要なかどうかというのはちょっと検討する時代に来たのかなというふうに思ったのです。男性特有の男性の社会的悩み、女性だからこその社会的悩みというのが、児童が感じている可能性があるのですが、男女どちらでも共通の悩みであることが多いのか、アンケート結果であるならば、敢えて取る必要もないのかなと思ったりもします。結局のところここで男性・女性を取ったところで、

アンケート結果の割合の6割くらいは男の子でしたよ、でも困ったことはここですよと言っているだけで、その結果に紐づけられ、先ほどの出身国と同じような意味合いなのかなと思ったりもします。ただ女性だからこそ悩んでいる児童もいるかもしれないので、そののところに書くかはちょっとわからないなと思いつつ、今の話を聞きながら思いました。

【事務局】 今のご意見のことでございます。このアンケート調査、おそらく今のお話の部分は、【資料8】の①でいくと、問4の辺りでしょうか。お子さんから見た関係の母親・父親。

【委員】 それよりも【資料6】の問1とか。

【委員】 【資料8】の3。

【委員】 男子・女子を書けとかあるので、悩んでいる子がいたら、そもそも答えが出ないという。

【委員】 【資料6】と…。

【事務局】 そうですね。ちょっとこれ、国のアンケートとして男女ちゃんと両方聞いていますかということだけがほしいなら…。

【コンサル】 そうですね。【資料6】の3の方ですかね。子ども本人の方につきましては基本的には国の方からは必須ではありませんので、これはどちらかというところと今までのアンケート調査の基本特性では当たり前のように聞くという流れになってしまっているところはあるかと思えます。確かに子どもの性別によってどのような感じ方が違うかというところは集計結果としては欲しいところかと思うのですが、それが計画の方にどう生かせるのかということ考えると、なかなかそこは活かしづらい部分はあるのではないかと思いますので、この辺りは確かになかなか結論にはならないですが、削除してもいいのかなというところは今の時代あるのかなと思えます。

【会長】 関連意見で。いま男性ですか女性ですかというふうなアンケート調査のことにに関して、ちょっといろいろなアンケート調査をしているところを見ているところもあるのですが、答えたくないというふうな項目をつけたことが多いです。女性・男性・答えたくない、とかいうふうに区別をしないということも、なくはないので一般的にはなっていないのですけれど、性同一性障害とかいうように、自分の性をどの時点で認知したのかというようなことに、違和感を覚えたのかというようなことで、遡って、自分が一応男性ですと言われていたのに大きくなった時に違和感を覚えたというのが、いつ頃まで遡ればいいのかというようなことを問うたときに、早い子どもさんの場合は保育園、就学前の段階でそのように違和感を覚えたというような方々が、大人にもうなっておられて、どの時期からだろうと遡ると就学前の4歳児さん、5歳児さん、とても早い子は4歳児さんくらいで思ったことがある。ただそれでトイレに行くときとか、いろいろなことをとても不自由ですごく違和感を覚えたというようなことでした。それは女性の側の方でも、女性の側の方は人数としては今のところあまり明らかにされていないことの方が多いような気がしますが、遡るとやはり就学前後というか、その辺、小学生になる前後とか、その辺のところでは思っていた。それから思春期になればなるほど、自分の体の性と、体に変化が女の子の場合は起こってくるということがあったりしますので、そういうようなときにとてもつらかったというようなことの報告というものはだいぶ出されているとは思っています。

アンケート調査の時に性のことはそういうふうなことが、その人それぞれの中で皆さん思っているとかいうようなことに対しては、長い間私たちはあまり知らなかったというところがあったのだろうと思います。でもいろいろな今アンケートを取るときに必ずしもそれが男女差というものではなくて、その人がどういうふうな感覚を持っているのかということで、一応男性・女性・答えたくないとか、自分の中ではこっちとかということまで言えるというようなことを考えているという感じではなくはないということがあるような気がします。子育てというふうなことで言ったときに、その人が生まれてからずっといろいろな認識をしてきたり、自分とは何ぞやということを考えていくこと、それに対しての支援というか援助というものを、どうあるといいだろうかということを考えるということや、想定するというか、そういうようなことも組み入れたうえで、支援していくというようなことを考えるということ考えた場合には、本当に今違和感を持つ人たちにとっては、ちょっとそれは聞きにくいかもしれない。本人自身がそれで書きたくなければ空欄のゆとりというのも一つの選択肢だと思うのです。でも答えたくないというのと、そういうものを入れるのと、それからどっちも何も書かないで出すというのとでは意思の現れ方がちょっと違うニュアンスがしたりもしますので、どうするかという、そういうことについてのご本人さんの痛みとか辛さというようなことについては、そういうことはあまり思わない側で育ってきた側としてはなかなか理解しにくいこと、あっ、そういうふうな大変なことがあったんだねということには気づいたりする、気づくこと自体は友達でいないとなかなかわからないというようなこともあったりしますので、今回はどうするかというようなことについては決断は難しいのかもしれないと思うのですが、言いたくなければ選択肢なしでもいい気がするのですけれど。どこかにあったりするのもいいのかもしれないのですけれど、必ずしも答えなければいけないこともないですよ。ただ最初の方に出てくるので、あなたはどっちですかというようなことが。そうするとそういうのに慣れてきたりすると、そこですごく辛い思いをするということがあるのかもしれないけれど。

それで今回のことはどうするのですかということ、課題として実際にやっていかなければいけないところがあるのですけれど、今のご意見をどう受け止めてくださるのかということはまだあるかもしれません。明日出すということではないので、このへんのところはどうしたらいいのでしょうかという課題を投げかけてくださったということかというふうに受け止めました。意見というか、そういう情勢とか情報としてのこと、こういうことがあるとか。委員さんの質問、よろしいでしょうか。

先回の会議から資料をたくさん作っていただいて、どういうふうに捉えたらいいのだろうかというようなことがあったと思うのです。それを先ほど名豊さんの方から丁寧にご説明いただいて、その前にこの資料をまずは作っていただいたというようなことについて、より明確に見えてきたというようなことがあること、それから福生市の位置づけというようなこういうふうなことの全体像の中で、福生はどのようなということもちゃんと捉えていただいて書いていただいてまとめてもらえたということがありがたいことだなということや改めて思いました。それと改めてこれらを見せていただいて思うのは、子どもというのと若者というの、若者というのが、たびたび登場してくるというようなことを感じたりしています。若者というのは何歳くらいなのだろうとか言うようなことも思ったりするのですが、そこまで入れての子ども政策というようなことなのかというようなことは、子ども期はいつまでというのものはものすごく難しいことだろうと思うのです。年齢差の関係とかそういうようなことけれど、体的にはそれぞれある程度の準備状況が整ったとかいうふうなことも成長してきたのと同時に、性の成長とかというふうなことについてはあるのかもしれないと思うのですが、そういう点で子どもというのと一応18歳で成人ということで、私などが成長してきた段階では20歳だったですし、それが18になった。18というのは高校3年、順当に行った場合には18歳で到達するわけですが、以前は20歳だったわけですよ。そうすればこの何年間かの間に、第1期計画の時にはまだなかったと思う

のですけれど、20歳ではあったと思うのです。第2期計画の時はどうだったのでしょうかというのがちょっと記憶があいまいだったりするのですけれど、その辺はどういう区分にしていってということで、子ども、若者がどの辺までなのか、ちょっとわからなくて、若者を入れるということだとするならば、その人が年数を重ねてきたときにその人自身が子ども時代というか、そういうものも含めながらの中で、人として生きていくときの世代としてのものを引きずって行ったり、いろいろなことが含まれるからなのかなと思ったりもするのですが、そういうかつてはあまり思いもしなかったようなことと向き合いながら、男子とか女子というものも作って行ったり、このところではそういうようなことは聞いていないけれども、こういうことがあるようだというようなことは、考察というのかそういうことになっていくのか、その辺のところもちょっと見えにくいというようなこともあるのかもしれない。どうしてもクエスチョナリーを作らなければならないということがあったりするので、どういう立場をとってというようなことについてのことが、もう少しある程度の納得が得られるようなところが出てくるといいのかなというようなことを皆様方のお話を伺いながら思ったりもしました。

いろいろなご意見を出していただきまして福生市に外国籍の方が多いか、子どもが生まれた時に、両親、父親・母親というか、生を受けた側のお二方がいるでしょうということで、そういうことで考えた時に、かなり外国籍の方が多いということがあったりしますので、そういう点のことも併せて見ていくと、実態調査的にこういうふうになりますよというようなことはその時期ですので、改めてその先の子どものというものと若者までを含むとしたら、どういうふうを考えるかというところを併せながらのクエスチョナリーということで、出てきたものの結果の読み取り方ということについても大事なことなのかなというようなことを思いました。

多くの人たちがいろいろとこういう点はいかがかというようなことについて出していただいたことで、あまり気づかなかったところを気づかせていただいたのではないかなというようなことを思います。受けて立つでは、そちらの作成者側になるのはとても大変かもしれないと思いますけれども、どの辺で今回はいくのかというようなことはちょっとどこかできちんとやっぱり求められるのかもしれないと思いますので、そういう部分が文言が増えるというようなことか、またはそのことはちょっと今回は踏み込めなかったかもしれないけれども、課題としてはあるとかいうのは、どこか別のところかなんかで見えるのかとか、そのようなことが多分含まれてくるのかもしれないという気がしました。大変な作業だと思うのですけれども、作業というかこども大綱自体がまだ出ていないという状況の中で、進めざるを得ないことをやっていかなければならないということになってはいますが、先ほどから行政さんからの方のご意見もいただいて、実際にやっていくということで、集計した結果としてものの見方を含めて、いろいろとご意見をいただいたのかなというふうに思います。何か言い足りなかった、はい、どうぞ。

【委員】 質問事項ではないのですけれど、アンケートにヤングケアラーを知っていますかというこの部分も調査したいところなのですが、例えば知らない子がアンケートをして、ヤングケアラーという言葉があるのだ、子どもの権利がという言葉があるのだ、何だろう、で質問の説明が終わるような気がするのですが、何かアンケートの後読んでくださいじゃないのですが、ヤングケアラーとは何か、子どもの権利とは何か、ヤングケアラーで悩んでいたらちょっとここに電話してみようみたいなものがちょっと何か付いていると、出した子ども、せっかくだからヤングケアラーとは何だというふうにちょっと思いました。

【会長】 サービスとか、レスパイトとか、そういうふうなちょっと聞いてもわからない用語の解説とか、そういうふうなことというのはどこかにあればいいのかもしれないですね。

【事務局】 ヤングケアラーに関してはアンケートに関しては注釈で説明を書くというのと、あとは小学校とかに対して子ども家庭支援センターで、夏休み前とかにチラシを配っているのですけれども、そこにヤングケアラーじゃないですかと、直接的ではないですが、何か困っていることはないですかみたいな形のチラシは全校生徒に配布をしております、これはまだ完全な確定ではないのですけれども、ヤングケアラー自体に関する調査自体を小・中学生に対しては、できれば今年度やりたいと思っているのですけれども、子ども家庭支援センターの方で計画をしております、まだこういうものというのは固まっていないのですけれども、一応実態調査という形で実施したいとは計画をしているところです。まだ確定ではないですので、こういうことですかというふうにはこの場ではお答えできないのですけれども。

【委員】 ありがとうございます。

【会長】 ありがとうございます。大丈夫でございますか。他に何かございますか。大丈夫でしょうか。色々ご意見が出ましたけれども、それを突き止めていただきながらというふうなところで、また実際のところで運んでいただけたらと思います。ありがとうございます。

【委員】 遅れてきたのに申し訳ありません。今のところでヤングケアラーについては、別で子どもたちに知っているかとか、どういうことかということを問うのは、存在するだろう、考えられるだろうということであった場合、今回の子ども子育て支援に関するアンケート調査の中で、子どもがヤングケアラーという言葉を知っているか知らないかというのを調査する必要があるかどうかということなのですが、その下の家族の中で世話をしている人がいるかどうかということについては、家族の状況を知るために必要なことだろうというのは理解できます。なのでその上の質問が必要かどうか。

【事務局】 これアンケートと実態調査の出すタイミングによるのですけれども、こちらのアンケートは12月、今ご審議いただいているのは、それでヤングケアラーに関してはまだ12月に出すとも、今11月で、12月に出すという可能性はたぶん低いですから、その後という形になりますので、それはこのアンケートの内容、今入っている知っていますかというのを踏まえた上での実態調査という形になると思います。まだその実態調査の形は全然決まっていないのです。ただ実態調査をやる必要があるだろうという形で計画を進めているところですので、そこら辺はこのアンケートも踏まえたうえで実態調査をやるような形になると思います。以上です。

【委員】 そうだとしても、今このほかの並んでいる質問とこれはとても毛色が違うというか、ほかのものとは違うなという感じが私としてはするので、今回これをとることでどこかとクロス集計的にしたときに意味合いがあるということであれば、いいとは思いますが、そうでなければ今回のここに入れる必要はあるのかというところがわかればいいのかと思います。

【事務局】 今のご指摘でございます。まず今回の調査が【資料3】の右側備考欄で、国の必須の設問ですかそういったような部分でそれぞれございます。今ご指摘のヤングケアラーについては問12とか問46とか問47とかそういった部分で、備考欄にございます通り、こども大綱を見据えた形での今回質問といった形で入れさせていただいております。ヤングケアラーに関する言葉が、まだこども大綱が出来上がっておりませんで、その中間整理という中で単語として見受けられますので、そういった意味で認知度という部分をここで把握できないかというようなところで入れさせていただいたもので

ございます。一つの考え方があるのですけれども、今回のここの質問については、そういった触りの部分といった形にはなろうかと思えます。必要があるかないかと言われると、基本的にはここの項目につきましては、先ほども申し上げた、令和6年度子ども大綱が国の方で出来上がって、それを受けて実際子ども計画というものを、第3期の子ども子育て支援事業計画はある一方で、そういったものもあえて復活しないのですけれども、そこを見据えた形で、ある意味では先行した形で少し見据えているような形にはなります。

ここ、言えないことによる影響という部分でいきますと、まずは触りの部分のヤングケアラーという言葉がどこまで市民の方に認知されているかという部分が形にはなって、それを受けて、その間に出来上がる子ども大綱の中で、どの程度まで踏み込みなさいというような部分のところを、令和6年度どこまで、ゼロベースからやるのか、最低限の部分把握したうえでやるのかという部分の違いが出てくるのかなと考えております。先ほど部長からもお話がありました実態調査につきましては決まっていないということもありますので、事務局といたしましては可能であれば、一度その部分のレベル感の方は把握をさせていただいて、どの程度そのヤングケアラーという言葉が、市民の方に認知されているのかという部分を、一度令和5年度中に情報収集させていただいて、次につなげていきたいかなと、そういうような思いで入れさせているような状況でございます。以上でございます。

【会長】 小学生の質問にヤングケアラーの認知度を問うものが入っていますよね。中学生とかはご本人の問題というふうになりますか。小学生は認知度と言うかそういうふうな形になっているので、子どもたちに聞くということになっていると思いますが、中学生の場合には…。

【事務局】 同じような形になってございます。

【会長】 いまここではっきりしないと次に進めないという状態になりますか。

【事務局】 そうです。ここについては今日お決めいただけないと、という形になります。

【会長】 今設問のクエスチョナリーとして前もって挙げてある中に、小学生とか中学生もあるのかもしれませんが、そういうことだけだとやっぱりヤングケアラーとかというのはちょっと足りないというふうにお思いになりますか。

知っていますかということと、知らないとか、何となく知っているとか、3つくらいになっていたと思うのですが、それは○をつけられると思うのですが、今回それだけではだめでしょうというようなお考えがあたりだとするならば、どういうものが入れればいいとかというようものがないと、進めないのかなというふうに思ったりしますがどうでしょうか。

【委員】 そんなにうんとこだわっているわけではないのですけれども、それ以外の質問については子どもがどういう状況であるかということを知っている質問なのですけれども、ここだけは知識を聞いているということで、何となく違和感がある。なので、聞いたところで子どもは知っている・知らないというのはつけることは可能かもしれませんが、ということですね。

ただヤングケアラーということだけがここで子どもたちの生活テーマ外になっている、生活の仕方というところで考えるならば、ヤングケアラーだけなのかなと思うのですけれども、ネグレクトの問題であったり、そういうようなことも含めて考えていった場合、ヤングケアラーという言葉はどちらかということ、子どもの権利を侵してしまっているのではないかということていくのだったら同じそう

いうものが並べて、どれを知っているかどうかを問われているところがあるのであれば、そういう部分なんだなというふうに思えるのですが、すみません、ちょっとそこが、毛色が違うなと思っただけです。

【委員】 そういう意味で言うと、【資料8】の5番の全部同じ順番だと思うのですが、このヤングケアラーの設問が4問あるうちの、上から2番目だけでいいのかなという気がするのです。ヤングケアラーの認知度を聞いてみたいということで実態調査も兼ねての4つの設問だと思うのです。1つ目は認知で、2番目から4番目は実態調査にどちらかというに近いかなとっていて、その本人アンケートは子どもが普段の生活でどのような行動をしているのかという把握で言うならば、2番の家族のケアをしていますか、自分の日常生活にそういうのがありますかという設問は他の質問と近いものがある。他の質問はどこで遊んでいますか、学校から帰ったらご家庭で何かケアする必要がありますかというような延長線上にあるような気がするのです、2番があるとわかるのか。

認知度を探るといふようなことでありますから、先ほどのような設問にヤングケアラーの意味を付けたらどうですかという返しでは基本的には認知があるはずだというふうな、というよりも配ってあるから認知がある程度あるはずだという前提なのかなと思うと、やっぱり2番目の質問だけでいいのかなと。そしてそれが誰なのかとか、どれくらいの頻度なのかとかどんな内容かは、より詳細な実態調査を試みれば今回のこの調査で、子どもの認識なのでヤングケアラーとは値しない誤差値も入ったとしても、ある一定調査したうちの約1割～2割はそういう認識のある児童がいるから、実態調査をしたところこうだったというふうにつなげやすいのかなという気はします。

【コンサル】 すみません。一点、申し訳ございません。全国的なところでヤングケアラーの実態調査というも行われておりますので、福生市さんが今後どのような調査をされるかということから、ちょっと別次元での話になるかもしれませんが、ヤングケアラーの方の実態調査をする場合というのは、子ども本人の調査で、ヤングケアラーの実態を把握するという調査が多いのではないかと思います。今回こちらの方の調査につきましては、保護者の方と紐づけ調査ができる状態になっておりますので、子ども本人が答えた結果が、親のどのような状況の中で答えているのかというのが分析できる形になっております。ですので、詳細のヤングケアラーの実態を把握するものではないかもしれませんが、子ども本人がどのように認識したりだとか、さらにはやはりヤングケアラーの問題は自分自身がヤングケアラーだと認識していない方、子どもたちというのが多い現状だと思いますので、それらから考えると、認知度であったり、世話をしているからもう一つ踏み込んだ形で、誰に対して、さらにそれによっての影響がどのようにあるのかということまで少し踏み込んだうえで、保護者の方と紐づけ調査したときに何らかの影響が出ているのであれば、例えば保護者の就労状況だとか、そういったところの影響が出ているのであれば、それはなかなかヤングケアラーの個別の実態調査では把握できない調査結果ではないかなというところで、設計の方をさせてもらっております。

【委員】 恐れず申し上げますと、実態調査よりも分析ができるこの結果になるかもしれないとおっしゃっている。

【コンサル】 実態調査の場合は、実際に世話をしている時間がどれだけだとか、週にどれくらいの頻度でだとか、そういう実態調査は把握できますが、保護者の状況、家庭の状況というところが、子どもの回答だけで見ている形になりますので、今回の場合紐づけ調査をして、保護者が答えた結果と分析をすることができるといふ、ちょっと別角度での分析ができるのではないかと思います。

【会長】 委員、大丈夫ですか。

【委員】 確かにこのアンケートを見た時に、ヤングケアラーという設問だけが浮いているという感じは私も受けました。でも結局多分、こども大綱、国の方針で恐らくヤングケアラーという言葉が新しい言葉で、昔からそういう状況に子どもというのはたくさんいたとは思いますが、少子高齢化の中で、どうしても少ない子どもたちにたくさんの負担がかかる世の中にこれからなっていくという、おそらく国のたぶん予想において、これからヤングケアラーと言われる子どもがもっとも増えていくのではないかと、たぶん予想しているのではないかと思うのです。なので、今回こういうところで、いわゆる言葉が独り歩きしてしまっている感があると思うのですけれども、こういうのも変な話、ムーブメントがあるじゃないですか。昔はネグレクトという言葉も、今はみんな知っていますけれど、あれも新しい言葉で、結局周知されていく中で、そういう子どもがいる、そういう状況があるという、何ですか、スモールステップで、みんなに認識を持ってもらう、言葉を知ってもらうという意味では、ちょっと唐突感はあるので、他の委員の方もおっしゃっていたようにちゃんと説明を加えて、丁寧な形で問うのであれば、今入っているところのその分析する、今回チャンスで、紐づけて調査ができるということを考えてもいいのかなと思います。

【会長】 ちょっと言っているのかどうか分からないのですが、私、小学校2年生からヤングケアラーというのがどういう定義なのかということが分からないのですが、うちの母親が、私兄弟の上下が亡くなっているということがあるのですけれど、一応6学年上の姉と、5学年上の兄がいて、私はその下というようなことで、生存している方は3人だったのですが、小学校2年生の時から家事労働及び、掃除・洗濯・家事労働、いろんなものを全部するようになりました。それはとても大変ということではなくて、最初のきっかけは神経痛というか前かがみになって、寝ていてということ、あとはどうしたのかちょっと覚えていませんけれど、学校から帰ってきたときに、夕ご飯が作れない、みんなの夕ご飯が作れないのでどうしようかというふうに言われて、それで、そうだったらどうなるのだろうかということがきっかけで、カレーなら作れるかなということになったのですけれど、一応、寝ているところに、野菜を探しては包丁を持って行って、どういうふうにするのかということを知って、たぶん最初は下手だったろうと思うのですけれど、何とかその日はカレーをガスの火をつけて、作ったというのが最初だったのですけれど、いろいろとその時々にかなりいろんなことが母は出来なくて、でも洗濯機が4年生くらいの時に、電気が入ったというようなこととか、いろいろなことがありましたけれど、掃除、洗濯、何とか家事労働が全部できるようになりましたね。食料の調達の方から。でも自分としてはそれがそんなに大変なことではないような状態であったような記憶はあるのですけれど、一番姉が4月に3時間くらいかかる遠方に行っていて、それがずっと続いていて、全然そういうことをしなかったのです。兄もそれなりに大変だったらしくて、家事労働と社宅住まいだったので溝掃除だとか何やらとかも結果的には母ができないということで誰がやると言えばじゃあ私なのかということで、動いていたということですので、それもヤングケアラーということになるのかどうか、私の中でちょっと意味がすんと来なかったのです。

今本当に具合の悪い保護者がいて、それで家族の中でその人がいろいろと担う。時間量としてもやっているかと思うのですが、何でそういうことで大変というふうに思わなかったのか、ちょっとよく分からないのですけれど、「ありがとうね、やってくれて助かったわ。」とたぶんそれを寝た状態の中で言っていた母が、なんか役に立っているのだというようなことがあったからなのだろうとは思いますが。今の子どもたちのヤングケアラーという実態と私などが経験してきたことと、どこが違う

うのかあまりよくわからなくて、ヤングケアラー、私そうだなと思うのですが、でもどこかしっくりこないというようなことがあったりするのですけれど、その調査をしようというのはどのくらいの頻度で、どのくらいの時間なのか、遊べないし、何かできないとかいっぱいありますよね。私の時代は高度成長期、団塊の世代のあれなので、まだ電化製品もそんなにたくさん無いという状態だし、それで社宅住まいでそんなに広いところではないですが、全部買い物はスーパーマーケットが年中開いているわけではないですし、市場まで買い物に行かなくちゃいけないというような状態です。だから今の社会状況の中でスーパーマーケットが近くにある、何かがあるという、そこでも上達をしていく、確かに全部時間がかかりますけれど、でも今でいうそのヤングケアラーの実態のところはどういう状態のところまでを言うのかということが、ちょっと私の中でははっきりしていなくて、というようなこともあるのですけれど。

それで、認識していますかという部分とか、そういう用語があって、それこそ知っていますかというようなことで、知らないとかいうのは答えられるような気がするのですけれど。子どもたちがどのくらいのということ、そのことをはっきりさせるのだったら、朝ご飯を作ったらどのくらい時間がかかったというようなことがわからないと、やっぱり実態調査にはならないのかなというようなことを思ったりするのですけれど。答えとかそういうことではなくて実際の経験上のことから考えると、でもそのことで私、家事労働全般は、6年生までの間全部していましたので、その後の一人暮らしとかそのようなことは、家計管理も含めて上手に割とできていたので、それはそれでよかったなというのと、何がその時に臥せていた母が、本当に切なそうになっていたということに対しては、何か自分が役割を担えたということでもよかったというふうに思っていますけど。今の子どもたちはそういう面ではいろいろな電化製品全部がそれぞれのうちにあるとは限らないですし、その経済状況がわからないまま聞いていくということも難しさもあるのかなというようなこともあるのかもしれないとかいうことも思ったりもします。あまり生産的なことにつながるようなことでなくてごめんなさい。

【事務局】 今、先生がおっしゃっていたみたいに自分が、昔はそのヤングケアラーというワードはなかったのですけれど、そういう形でやっていた、おうちの家事とか、お年寄りがいた場合はお世話するということはあったかもしれませんが、そういうのって今の子どもたちも自分たちはヤングケアラーだと思っていなくて、お手伝いの一環としてやっているという感じなのです。よその家に住むことは基本ないわけなので、比較ができないですから、そういうことで自分がやるのが役割として、当たり前で、特別なことという認識が、あまり自覚がないというのですか、そういった意味で今回のその先ほど委員もおっしゃっていましたけれど、そのワードとして出てきたというところで、子どもたち自身が自分で私はヤングケアラーですと思っている子って、そうそういないと思うのですけれど、ただ世の中にはヤングケアラーという言葉なんかがあって、家のお手伝いが、難しいところが家のお手伝いはいいって、推奨されたりする部分があって、ただそれがどこまでお手伝いというのか、それはもう家事労働みたいな形で学校に行けなくなるというのはもう相当な、子どもにとって望ましい状態ではないのですけれど、そこら辺の線引きなんか難しいところはあって、一言に良い・悪いと言えない部分ではあるのですけれども。そういった意味でヤングケアラーということを知覚するというか、存在を知ってもらおうということも一つ、このアンケートには意義があるのかなと。こういうものをヤングケアラーと言いますと。学校に行けないとか自分の部活ができないとか。それはある意味子どもの人権を侵害するということと自分の親を悪く言うみたいで子どもも言えないとは思っているのですけれど、そういうことがあるのですよと、子どもたちには人権があって、自分が望むように生きていいし、学校にも行っていいし、部活もやっていいところを子どもたちにも感じ取ってもらいたいというのも一つございます。

【委員】 今ご説明を聞いていて、そもそも子ども家庭庁ができたというのが、子どもが幸せであるためには子育て世帯である保護者、それに関わる教育者、これから子どもをつくろうとする若者たちみんなが幸せであるということが子どもの幸せになるという包括的な動きだったのはわかるのですが、やはり根本は子ども自身が幸せであるか、自分のやりたいことを何に強制的な我慢をすることもなくやることが幸せと感じられる世の中になっているのかということが、一番の柱だと思うのです。今回の国を含めた動きから国が主導しているところも。それで、ヤングケアラーという言葉が家のお手伝いをすることは自分のためになり、もちろん家族のためになって、それはいいことだと思うのです。でも世の中には親だからと言って、必ずしも子どもに優しくするとは限らない、そこに愛情のないいわゆる虐待状態にあるヤングケアラーというのが問題視されていると思うのです。子ども本人の意思でないお手伝いで、自分の人生が失われるという状態がヤングケアラーなのかなと思うのですけども。

【会長】 今回の質問の中では、その辺があまり明確に出て来ないですね。

【事務局】 難しいですね。

【会長】 でも、やったことがないので、意外にそういう設問をして、実態調査、いくつかでも子どもたちからの意見が出てくればもう少し見える化になってくるのかなというふうにも思うし、どこをケアしていくのか、大事にしていかなければいけないのか、そのへんのところが課題なのかなということですから、そういう言葉を使って、認識しているかとかそういうようなところの実態というようなことがわかることの意味合いというようなことはあるかなというふうに思います。

【委員】 そうすると今、保護者向けのもの子ども向けものを比べてみると、親御さんたちの方には13ページのところにヤングケアラーという言葉を知っていますかという同じ質問をしたり、米印で解説がついています。だけど子どもの方にはついていない状態です。これはさっきお話にもあったように、わかった状態で、そういうことを言うのか、でも知らないんで、つけていいのだったら書いておいた方がいいと思うのですけど、そうじゃなくて単純にヤングケアラーという言葉、ワードの音を知っているか知らないかということのレベルでもいいということなのだったら逆に説明は何も入れないで、この下のところにある3つの内容だけで、ヤングケアラーを指していることにはなるとは思うので、そういう聞き方もあるのかなと思うのと、片方にはついていて、片方にはついていないのはなぜなのかがわかれば、ちょっとすっきりするかと思います。すみません。よろしくお願いします。

【会長】 いろいろなものが私たちが知ることになった、ではないということですよ。そして多くの年齢の子どもたちの生活の中で、そのような役割を担わざるを得ないというか、そうでないと回っていかないとかいうようなことということを知ることになったというのにも、そんなに昔からではないという感じですし、その時期の子どもたちにとっての成長過程の中で、どういうふうに入るとその子の人権が守られたりしていくのかというようなことが、そういうことだけになったとしたら、欠ける要素ということが出てくるであろうというようなことも言われてきたのだなということもある程度の理解ができるということから、実態的な調査、こういう地方自治体のすべてのところが、この子育ての中で、ちゃんとしたものを作りましょうといったところに、そのキーワードのところに入ってきたその実態を含めたものが、大切だということが、前回の2回目にはなかったということになりますから、そしてその厳しい状況下にある子どもたちの実態を知らずして方策も立てられないということになる

のか、そこまで考えてのことなのかどうか分かりませんが、実態調査を今回の子ども子育ての関係と改めて第3期でするにあたって、音としての、そういうふうの名づけることができるようなことというふうな動きをある面ではせざるを得ない。そのことによってその子どもたちが大事な時間を違う形で担っていくということをやることによって、その子自身が育つであろうという状況が脅かされているか、そういう大変な状況になっているということの実態があるということがあるだろうなということまでは理解ができるというところで、だからそれはじゃあクエスチョナリーの中に、どのような文言を使って、丸を付けてもらえるのかというふうなことが問われているというようなことです。

そういう幅の振れというか、いろいろなものがあるけれど、認知度ということでは知っているか知っていないかわからないというふうなそういう感覚という中のどれかをやってもらえれば、ある程度は出てくるわけですけど、どこまでその子どもの育ちの中での大変さになっているのかということまでは、その中だけではちょっと浮かび上がってこないのかなというふうなことも気づくような感じに見えるような気がするのですけれども。全然そのことに対して問わない方がいいということではないですよ。この場の中では、一応設問があるとしたらそれは聞いてみましょうね。一度はきているでしょうというようなことはあるのだろうかというふうには思うのですけれど。それによってもちよとした言葉の組み合わせによって、問いかけられているものが違ってくるようになるとすれば、ちゃんとしたデータになってこないということになってくるのかなと。その辺のクエスチョナリーの作り方の難しさになってくると思います。なんかとても重たい。

【コンサル】 すみません。先程の注釈の件なのですが、確かに正確な認知度という形で考えると、注釈は入れないで、その言葉を知っているかどうかというところを聞くということは、確かに考えるところだと思います。しかし、アンケート調査というのはなかなか特に郵送式で問うアンケートというのはなかなか回答者の方に回答結果というのが、自分の回答結果が戻ってくるわけでないので、もちろん市として全体の調査結果というのは公表する形にはなると思うのですが、やはり回答したときの結果をもって、その時に何らか得るものをやはりそれぞれの回答者の方にも得てもらった方がいいのではないかなと思いますので、このヤングケアラーというワード自体を理解してもらおうというのも、やはりアンケートを実施しながらも周知をしていくという、そういう位置づけにした方がいいのではないかなと思いますので、やはりワードについては説明も入れながらの認知度というような形にした方がいいのではないかとこのところで、ちょっと今入っていませんので、つけていく方向の方がいいのではないかとこのように思います。

【会長】 そういう方向で検討していただくというところでよろしいでしょうか。はい、ありがとうございます。そのほか何かございますか。はい、どうぞ。

【委員】 今回のようなアンケートを通じて、参考にしていくということだと思うのですが、それを踏まえば、今ちょっとヒントになるお答えがあったのですが、子どもがそれに回答して、それが市の施策にどう影響して、つまり自分が答えたことによって、どう変わっていくか、どういうふうに見なおされていくかというのを、これまで、大人は自分でとりにいけると思うのです。特に意識が高い人であれば、このアンケートによってどういう施策が生まれて、こういう計画に落とし込まれて、こういう結果になったというのは、追って行けば行けると思うのですが、子どもはそれはできません。子どもがこれまでも似たようなアンケートを、市なのかどうか分かりませんが、回答していたと思うのですが、これまでこのアンケートによってどういうことが起きて、どうなっていたかということ子ども向けにに対して説明したことってありますか。

【事務局】 まさに今ご指摘のところ、まず福生市においては、私の知る限りそういったことというのはやってございません。まさに今お手元の資料の本人への質問の部分の中の（１）中段の上に子ども基本法の抜粋がございます。この第 11 条のところの下線が引いてあるようなところが、まさに今おっしゃっていただいたような、具体的に子どもの意見をどのように反映するのかという部分、これが今子ども基本法によってこういった部分で明文化されてございますので、今後まさに今みたいな部分につきましては、令和 6 年度にこども大綱が今年度中に出来上がって、そういった部分を踏まえて、令和 6 年中に計画を立てていくと。それに基づいて市はいろいろ施策を展開していくわけですが、その中で子どもたちのいろいろな声を聴いて、またそれをどう活かしていくかということが求められていることだと思います。この意見反映の仕方というのは、正直、全国的にはどうであればいいのかというのは、非常に悩ましいところではありますけれども、いろいろなそういった政治的にシンポジョンの上でこれを聞いてやって、その成果を何か…、いろいろなやり方はあるかと思うのですが、ただ子どもにどうやって届けるかという部分については、まず議論が必要かと思っています。この辺りについてはまた令和 6 年度、ちょっとタイミングはわからないのですが、そういった部分の中で、またご協議させていただければなというところでございます。

【委員】 質問した範囲では最近私は広島県某市の市政がすごく全国的に話題になっているということで、興味をもって拝見しているのですが、その中で、他の自治体でもあると思うのですが、市民の声が、いろいろな形でアンケートとか行政辺りで行われた結果、市政にどう影響したかというところをフィードバックする場がない。それを大人だとできるけど、興味があればですが、いわゆる執行側は市民に市政の一部を担ってもらうためにそういうことを積極的に発信しているのかもしれないのですが、こういった形で子どもを巻き込んで子どものためにといいながら、実際に読ませてはいるけれども、子どもがそれをきちんと捉えられていない。要するにこのアンケートの子ども自身がアンケートに答えて、それが市政に反映されて、計画が立っていくということを、特に高学年であれば自分の意見が反映されたということがモチベーションになって、要は結果に表れているわけですね。見えないところでアンケートを取って、それがどうなったかと言われても、じゃあ何のためにアンケートをやっているのだというふうに思われてもしかしたらいるかもしれない。要は答えたからと言ってそれが何か形になるものではないので、だったら自分の好きなことをやっていた方がいいよという子もいるかもしれないのですが、もしそれが自分の結果が目に見えたということが一つのモチベーションになって、じゃあ回答しようというような形になれば、交流感がゆくゆくは生まれるのではないかなというふうな思いをもって今話させていただきました。

以前、山内先生の持論の中で、いまお子様たちはタブレットが入っていて、結構安易にいろんなアンケートを、親とか施策者側から見れば、タブレットでパンと送って、時間までに回答してくれるのですが、それは効率的なやり方なのかもしれないけど、現場側としてはそれに対応するのにいっぱいいっぱいだという話もありましたが、結局子ども自身がそれについて能動的にやっていくということができてくれば、その負担も少しは減らせるのではないかということでちょっと質問させていただきました。なのでぜひ今後そのこのアンケートはどういうふうに反映されたか、どういう展開になっていったかというのは子ども自身が見えて、子ども自身が自分の中で、活用じゃないけど、市政に興味をもって、アンケートを答えるということに対してのモチベーションが上がるようなことをしていただけたらと思います。

【事務局】 ありがとうございます。まさに今の部分は非常に重要な視点かと思っております。正直なところ、

おそらく今タブレットの話がございました。そういった意味でいろんな場面で、子どもたちに、大人が声を聴きやすくなったと。一方で捉えようによっては大人の都合で子どもの声を都合よく聞いて、それ度子どもの声を聞いたんだと、実際には子どもがそれを理解したかというのは二の次というのは、まさにそういったご指摘だと思います。先ほど子どもの基本法の話も申し上げましたけど、やはりそういった部分も今までの考え方というのでしょうか、その辺りがこれから通用しなくなってくるのかなという認識はうちの方にも当然持っていて、今回の基礎調査については子ども子育ての計画に対する調査になりますけれども、おそらく次回の審議会の時に、調査結果はお示しできると思います。分析にどこまで行くかになりますけれども、一つはその内容を、通常ですといわゆる報告書という形になります。それはもともと次の令和6年度に向けての資料になりますので、おそらく令和6年度という形になると思うのですが、それを踏まえた計画を実際に作っていく中で、当然こういった審議会にご意見も伺いつつ、子どもたちにも何かしら聞く機会というのは設けなければならない。その中で、今みたいな例えば令和5年度でやった調査、こういうような皆さんから声をいただいている、今それを受けて今度作ろうとしている計画の中の、こういった部分に声を活かそうとしている、みたいなところは何かしらの子どもにわかりやすい形で、お示しするような機会が必要かなと思っておりますので、その辺り、ちょっと来年度どういう形でできるかというのは検討させていただきたいと思っています。

【委員】 実現をお願いします。

【事務局】 すみません。一個補足なのですけれども、意見を聞く取り組みというのは今回のうちの方の本当に肝になっていて、それをどうフィードバックするかというのはすごく私どもも今相羽が答えたように、なるべくわかりやすくというところがあります。ただ何もしていないところということでもなくて、動きはありまして、実際ちょっと小さい話ですけれども、学童クラブを今回新設なりしているときに、その名前を子どもたちに決めてもらっているのです。こういうちょっとしたことですけれども、一つひとつの取組み、そうやってアンケートをもらって、その成果が出ているという、その典型的な、こういうふうになりましたよという、そういうフィードバックはできているのですけれども、やっぱりこういう大きい計画になりますと、そういうのが薄れてしまっている。ただ、それを聞いただけということではなくて、それがどういうふうになったのかという、今みたいに名前がこういうふうになりましたというのは、非常にわかりやすい。ですので、こういうものを増やしていくということも一つのやり方なのかなというふうには思っていますけれども、ただやはりいろいろな声を聴きながら、それをどういうふうに戻して、それをどういうふうにわかりやすく、こういうふうなものに使わせてもらいましたというところは、丁寧に説明していく必要があるかなと思っております。ただそういった動きも少しずつ我々の中でも、やっぱり子どもに聞かなければいけないねという部分は、そういったタブレットというものを使いながら、そういう成果が示せるようなツールができているということは、少しずつでありますけれども、そういった機会は増やしていければなと思っている。参考までなのですけれども、ちょっと小さい話ですけれども、子どもにとってみればやっぱり質問がどういうふうフィードバックされたかというのは大事な視点だと思いますので、ご指摘の通りしっかりやっていきたいと思っております。よろしくをお願いします。

【委員】 確認させていただきたいですけれども、たぶん名豊さんの説明が多分【資料3】くらいで止まっていると思うのですが、この先の資料の説明というのは名豊さんから伺ってから質問したいところがあるのですが、説明があるのかどうかちょっと教えていただきたいのですが。

【コンサル】 あります。いいですか、説明の方させてもらって。

4 その他

(1) 子ども本人への調査について

・子ども本人への調査の目的及び趣旨について説明

【コンサル】 それでは【資料4】以降の説明の方、させていただきたいと思います。まず【資料5】の方をご覧いただけますでしょうか。先ほど事務局の方からもお話の方がありましたが、今回子ども本人への質問ということで、【資料4】【資料5】【資料6】という形で準備の方させてもらいました。今回この子ども子育て支援審議会の方につきましては、第3期子ども子育て支援事業計画、いわゆる子ども子育て支援法に基づく計画に対しての審議の方、行われている形でございますが、先ほどからご意見が出ています子ども基本法、さらには子ども計画というのがほぼ同じような時期で、計画の策定をしていかなければいけないという形になっておりますので、当市の方から、今回業務委託を受けている関係で提案の方、させてもらいながら、今回子ども本人に対しても、同時期に調査の方、させてもらった方がいいのではないかとという形で提案の方させてもらっております。その関係でまだまだ国の方からも資料が出ていないところで、若干この概要の中で提案するというところで、ちょっと手探りのところもありますが、資料として取りまとめの方、させてもらっております。

そちらの方が【資料5】ということで、子ども基本法の主旨を踏まえてということですが、第3条と第11条の中で、子どもの意見表明、子どもの声を聴くという形で位置づけられております。そういったところから、この調査の概要につきましては、小学4年生から、高校3年生という形にしております。ただ先ほども意見の方、交わされておりましたが、子ども子育て支援法につきましては、こどもの定義が18歳までという形になっておりますが、子ども基本法につきましては、発達段階における子どもたちという形で、明確に年齢の方が切られておりませんので、ここに対しての調査対象というところが非常に難しいところかと思っております。しかしなかなか年齢をどこまで見るのかということになると、設問自体も非常にぶれてしまうところがありますので、今回は小学4年生から高校3年相当という形で、対象の方を区分して、そして設問の方を設計するというような形になります。そして小学4年生から中学3年生までにつきましては、すべての子どもたちという形で入れておりますが、今回、Web調査ということで、子どもたちのiPad、こちらの方の利用を活用しながら、アンケートの方を回答いただくという形になりますので、福生市立の小中学校に通う子どもたちに対して、iPadで回答をいただくというような形で、今回こちらのすべての子どもたちという形を提示の方、させていただきたいと思います。そして高校生600名というところですが、各年齢200名ずつ、無作為で抽出するという形で、実施の方、させていただきたいと思います。

今回設問を設計するにあたりまして、3番のこども大綱の策定に先立つ調査の実施についてということで、いくつか入れておりますが、こども大綱というところが【資料4】の方で、今後5年程度を見据えた子ども施策の基本的な方針と重要事項ということで、こども大綱の中間整理というものが今パブリックコメントの方で挙がっておりますので、そちらの資料の方を今回準備の方させてもらっております。こちらの方について細かな説明はできない形になりますが、特に重要なところとして3ページ目の子ども施策に関する基本的なほうしんということで、6点挙がっています。こちらでも1つ目でいくと、子ども・若者ということで、権利の主体として認識するということであったり、さらには2番の方では子ども・若者・子育て当事者の視点を尊重して声を聴くということだとか、さらには子ども・若者・子育て当事者のライフステージというところがありますので、非常にこのライフステ

ージも非常に長い形のライフステージがあるということ。さらには4番では貧困の格差と言うことで、貧困問題も取り扱っているというような形になります。

こういったところを今回の基本的な方針の方でも示されておりますので、これらの内容を受けた時に、すみません、【資料5】の方に戻りますが(3)の方で、以下の視点で設問設計をするということで整理の方させてもらっています。まず1点目が個性や多様性が尊重され、尊重が重んじられ、自分らしく、ひとりひとりが思う幸福な生活ができているのかということ。夢や希望をかなえるために、希望と意欲に応じて、のびのびとチャレンジできているのか。さらには自らの意見を持つための様々な支援を受けることができ、その意見を表明しているのか。さらには不安や悩みを抱えたり、困ったりしても、周囲のおとなや社会にサポートされているか。さらには働くこと、また、誰かと家族になること、親になることに、夢や希望を持つことができているのか。

こういうようなところを子どもたちに状況として把握の方、していきたいということで、裏面の方では設問構成と意図ということで、今のこれらの内容を把握できるような形で設問として聞く24問の設問の方準備をさせてもらっています。こちらの方の設問意図につきましては、先ほどの視点を踏まえてというような形になっております。こちらの裏面の方では質問項目だけになっておりますが、こちらが【資料6】の方と基本的には連動しております。【資料6】の方では具体的に選択肢の方も準備しておりますので、こちらの内容を見ていただきますと、設問意図の方と連動の方しておりますので、ご確認いただけたらと思います。以上で説明の方、終わります。

【会長】 ありがとうございます。で、質問ですか、よろしいですか。

【委員】 この【資料5】の子ども本人への質問についてというのはあくまでもこの会議向けに説明資料ということですね。【資料6】の本人調査の質問には郵送で抽出して送るアンケートのやつが説明みたいになっている、子どもに対してなぜこのアンケートの質問に答えなければいけないのかという説明が全くなく、いきなりぱっと質問が来ている状態で、これは間に合わなかったのか、それとも説明書きは添付しない予定なのですか。

【コンサル】 基本的には説明書きが入りますので、今回の段階ではちょっと提出の方、させてもらっていないというような形になりますので、すみません。

【委員】 やっぱり子どもが本当にきちんと答えてくれることが、やる意味を持つことじゃないですか。前にこのアンケートをやるという話を前の審議会でしたときにも、なんで自分たちが好きなゲームをやる時間を削って、この質問に答えなきゃいけないのかという、じゃあ、子ども基本法というものが日本でできたんだよということだとか、福生市という場所が子どもたちが過ごしやすいいい街になっていくためにいろいろ教えてほしいんだよということとか、そのことを子どもにもきちんと誠意をもってアンケートに答えてもらえるような前書きをつけていただけると、よりよいアンケート結果が得られると思いますし、たぶんそういうのを子どもはわかると思う、これにきちんと答えることが自分のためになるんだとか。もうダイレクトにそういうことをきって書いてもいいと思う。答えてくれたあなたたちの意見が、これからの福生市の子どもたちの生活や人生を支えていくことになるんだよ、みたいなことを、大人向けの硬い文章でなく伝わりやすく載せてあげるといいのかなと思います。付けていただけたということだったので、それは非常にありがたいのですけれど、この調査では、ヤングケアラーは取り込まなかったのはなぜですか。あっちでは取ってこっちではなかったのは、向こうでアンケートの結果が、認知度が得られればそれで十分だから、こっちには入れていないのですか。逆

に向こうには入っていないけど、こっちには子どもの権利についての質問が入っている。こっちに入っていたり、あっちには入ってなかったり、保護者向けにはたぶんどっちも入っていたと思うんです。子どもの権利とヤングケアラーと。そのばらつきはどういう意図で起こっているのか教えてください。

【コンサル】 もう一度その辺りの整理も必要になるかと思いますが、やはりアンケート自体どうしても、子ども子育て支援法のニーズ調査の方については、設問自体がかなり国の方から指定のあるものという事で、多くなっております。しかし今回のこちらの子ども基本法に基づくアンケート調査というのは、まあ、もしかして国の方からまたそういう設問というのが下りてくるかもしれませんが、今現時点としては特にそういう制約の方、出てきておりませんので、独自設問だけで構成されている中で少しでも回答をいただくには、やはり設問自体もできる限り焦点の方を絞っていくというところが必要になってくると思いますので、そういったところで逆にそれぞれのアンケートの方で、採っていくものの整備というところも必要になってくるかなと思いますので、そういったところでこの子ども本人の方については、先ほどの（3）の方の今回把握の方、していきたい視点に基づく、設問設計というような形で、準備の方させてもらっているところがあります。

【委員】 あと1点、いいですか。上の方の間4とか、間11は答えたことに対して、さらに重ねて質問があると思うのですが、例えばあなたの考えや思っていることを聞いてもらっていると思いますかということに対して、そう思う、じゃあどうということを聞いてもらったのですか、みたいな質問に進んでいくと思うのですが、例えば間18とかの質問で、あなたには遊んだり、休んだり、自分の好きなことをする時間は十分にありますかということ、例えばあまりないとか、ないと答えた子に対して、続きの質問があるといいのではないですか。これは他の項目でも、間8の困った時、つらい時、誰に相談しますか、という質問で、選ぶと思うのですが、ここに実際今何か困っていることはありますか、みたいな自由記入欄があると、困ったときに相談する人がいる・いない、こういう人たちに相談する、じゃあ実際子どもたちが今困っていることってどういうことなのだろうという具体例が、この質問だけだとわからないので、好きなことをする時間が十分でない理由さえ、何なのかわからないと、どうしたら子どもたちが自由に遊んだり、自由なことをする時間を作ってあげられるのかという答えにたどり着きにくくなると思うのですが、どうでしょうか。

【コンサル】 そうですね。そういったところの部分につきましてやはり掘り下げる部分と、掘り下げなく、親設問の方で止まるという部分というのはやはりその後の結果をどう計画に活かしていくのかというところの青写真というか、そういったところの部分も必要かなと思いますので、今確かに困っていることが何かというところを具体化することによって、それに対しての支援というところも必要になってきますし、先ほどの遊んだり、自分の好きなことをする時間がないという方については、そこをどうフォローするのかというところにもなると思うので、そちらの方については設問の方、いま一度検討の方をしていきたいと思います。

【委員】 ありがとうございます。

【会長】 時間的に間に合いますか。今、相当変更というか、案として出されたものではなくて、案として出されたものに対しての意見というものがたくさん出されたと思うのですが、次回はいつするのかという、全部お任せして、私たちはその質問項目というものについての点検をするということを踏まえた上で、先をというふうに捉えているわけなのですが、いま数々のこと、出ていますよね。それを

さらに深掘りを、その回答だけだと、その先がないと意味がないというふうなことだとすると、その辺のことも入れていくということになるなら、かなりきちんとその子ども自身の考え方を問うて、それについて、というようなことになっていくということだと思うのですが、時間的に間に合いますか。

もう一回会議、個別的にこういうものになりましたということで、資料の編成、私はそれでいいですというふうに、ここ一堂に会した場合には、そこで合意を取るとかいうのは多少はあるということも可能性としてはなくはないということはあると思うのですが、合意を取るとか一堂に会するとかというところが、一番どちらかという早く、時間的に考えたらその場を設けたりすると、そういうことになったのねということになってゴーサインというふうになるんだろうと思うんですけど、今かなり細かく言うとその先、その先というようになっていきますよね。分量的にも多くなるかなというようなこともありますし、対象の子どものどういう文言にわかりやすい言葉でというようなことになると、幅がありますよね、子どもたちには。そうすると子どもたちに口頭で読んでいただいて、タブレットでというので、それでちゃんと答えましょうという方法論だというふうに聞いていますけれども、そのクエスチョナリーそのものについての文言がそれでよろしいのかどうかということについてのことは、今回出された内容とはもう少し踏み込みながら、そこをより詳細に得ていくということになるのだろうと思うのですが、次回はいつなのかということになると、会を重ねていかななくてはいけないということになると予定の方が大変ではないのかなというふうに捉えたのですが、それは間違っていますか。

【事務局】 今回のアンケートにつきましては、できますれば特にこちらの本人のアンケートの部分の、前書きの内容でしたり、ちょっと掘り下げる内容というのが出てきていましたので、前書きをちょっとまだ示していないという状況もございます。時間的な制約もちょっとございまして、できますれば私ども、会長の方にご相談させていただいて、それでそのうえで皆さまにお示しするような形を取りたいのですが、いかがでしょうか。ご意見いただいたものを私どもで精査いたしまして、一応会長の方にご確認いただいて、そのうえで皆さまにお示しするような形を取らせていただきたいと思います。ちょっと会、また集まってということはなかなか時間的な制約がございまして、難しい状況ではあるのです。アンケート的には12月にはやりたいものがございまして、学校側にもちょっとこの内容でやりたいことを示す、校長会ですとかそういったところでお話ししなければいけないという会議の制約もございまして、できますれば、今頂いたものをもう一度精査いたしまして、会長の方にお示ししてというような形を取りたいと思うのですが。

【会長】 時間的には今日合意を取ればそれで進んで、この先改正されたものはこうですよというようなところが、運んでいくというようなことであつたと思うのですが、それがずいぶん時間的にはちょっとずいぶん近づきましたので、それで気にして、そういうまとめ方、今日の皆さま方のご意見をいただいたうえで、案を出して、こちらで皆さんの代表としてその責務を果たすというようなことでよろしいでしょうか、皆さん。

【一同】 (拍手で承認)

【事務局】 ありがとうございます。

4 その他

次回の審議会について

【会長】 ありがとうございます。では、その次の議題、よろしいでしょうか。皆さん方のいろいろなご意見を福生に対しての熱い思いを出していただき、子どもたちのいろいろなことについての今後を、相談したうえで、こうじゃないかと、その声を聴かせていただこうと思います。では、その次、最後になります。その他になります。次回の審議会について、という項目になります。事務局、説明をお願いいたします。

【事務局】 次回の第4回、4回目の審議会でございますが、今のところ、令和6年2月頃の開催を予定してございます。次回第4回の審議会では、本日ご審議をいただきました子ども子育てに関するアンケート、議題の今日の（2）のほうです。そちらの集計結果をご報告できると思います。またその間におそらく国の先ほど来お話のありました子ども家庭庁の発起、あるいはこども大綱、そういったものを踏まえた形で、令和6年度、来年4月以降、こういった動きをするか、あるいは審議会の皆さんもどういったご協議いただけるか、そんな部分のお話ができればなと考えてございます。また開催についての詳細が決まりましたら、改めて開催通知お送りさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。説明は以上でございます。

5 閉会

【会長】 ありがとうございます。では、本日の審議会をこれで終わらせていただきます。どうもご意見ありがとうございました。